

※フリーペーパー  
『earth garden』Vol.27  
2015 冬号  
より転載させて頂きました。



## 細美武士 (the HIATUS)

編集：渡辺 亮、奈良岡 健太／写真：廣古 真

日本のロックシーンを牽引する、オルタナティブ・ロックバンド「the HIATUS」の細美 武士さん。東日本大震災以降、災害ボランティアに参加したり、傷ついた被災地に若者の拠り所であるライブハウスをつくる、「東北ライブハウス大作戦」に協力したり、BRAHMANのTOSHI-LOWらと共に、アーティストとして東北支援のライブや脱原発のイベントにも第一線で動いてきた。未来のために何が自分にできるかを問い続け、今できることを自ら行動することで僕たちに希望と勇気を与えてくれた細美さん。震災から3年が経ち、今、思うことを伺った。そこには、等身大の姿が浮かび上がる。

### 311を境に

僕は、社会と接点を持つてこと、前はあんまり感じてこなかったけど、最近はそのを少し、感じられているんだよね。

人や社会がどうであろうと、ずっと興味はなかったし。ガキの頃から、殊外感も感じていたし。人の群れみたいなものは大嫌いだった。学校社会もね。何か、ずっと、敵対してきた感覚があるよね。

震災後だって、最初から今みたいだったわけじゃなくて。単純に何がしたいっていう衝動で東北に行っただけで。物資を運んだり、ボランティア活動をさせてもらった。その間も本業は続いているから、沖縄でライブやって、飛行機で成田まで帰ってきて、そのまま空港から車で東北行って、朝からボランティアやって、15時に終わって帰ってきて、また仕事をしたりとか。そんな感じだった。

TOSHI-LOWともたまに話すんだけど、俺もどっかで命の使いどころを探してたようなところがあったから。「ああ、ここじゃん」って思ったんだよね。だから放射能も何にも怖くなかったし、3日寝なくてもこのまま心臓止まっちゃうなら、それはそれだって。めっちゃ独りよがりな感覚なんだけど。なんかの役に立つ使い方があるんなら、まあその方がいいよな、みたいな。そんな感覚だったと思う。最初は。

で、東北ライブハウス大作戦のハコも出来てさ。震災直後は、みんなでとにかくあそこまでたどり着けなかったって思ってた。

ボランティアでお手伝いさせていただいた方の家の庭に、防潮堤のでっかい松の木みたいなのが流されて来てて、みんなでノコギリで切って運び出したらその下から、中学生の卒業文集が出てきた。泥だらけのやつが。まあそれ以外もいっぱい出てきてさ。なんかそんなふうにして、ちょっとずつ、今まで関係なかった世界が、関係ないものじゃなくなっていく。

### まわりに伝える、伝わるもの

そういう感覚が、今、こういうことやろうと思ってるモチベーションに繋がって。善良でいたいとかじゃないんだけどさ。自分が善良じゃないのはわかってるし。人間、誰だって心の中には悪い人がいるのもわかってる。だからお金の方がど大事って言ってるような連中でも、まあきれいごと言ってる分、自分は善人だって面してるやつらよりマシになって思う瞬間もある。でもなぜか、自分がこの世を立ち去る時に、次の世代の連中には、もうちょっとマシな世界を残したいっていう気はするんだよ。

俺はどんな選択であれ、自分の意思で選択をしたっていう実感が欲しい。だからあんまり、「今こうやって、行動するべきだ」って、人に言う気がないの。「食べたいものがテーブルの上にあったら、お腹がすいた人が勝手に食べる」ぐらいの感じで活動できれば、一番いいなと思って。もし俺たちがテーブルの上にちゃんとした食いもんを置いていかなかったら、そもそも努力が足りないと思うんだけど。人の口をこっから

最近読んだ小説の帯に書いてあった。

腹痛は伝染する。そして、勇気も伝染する。

デモに参加した学生がスピーチした。

私は私の自由と権利を守るために、意思表示することを恥じません。

死んでしまったラッパーが言った。

生きているということ  
たった今この瞬間が過ぎていくということ  
いつかは死ぬとわかっていながら  
永遠なんてないとかわかっていながら  
それでも人は愛するということ

未来っていうのは、今この瞬間の積み重ねであって突然、ポンッと現れるものではない。

じゃあ、あなたは今、何をやるのさ？

こじ開けて、「これ、絶対食った方がいいから」ってまでやるのは、俺のやり方とは違う。ここに置いておいて、まず自分たちはうまそうに食う。「それ美味しいの？ちょっとおいしい」って言われたら、「いいよ」って返す。それが、社会的活動をまわりに促すときにできる、最大のこたなんじゃないのかな。

自分たちが何らかの活動を自分で選択して、楽しんでやっていっているところを明確に出した方がまわりに伝わりやすいと思うし。俺、誰かのためにやってるっていうよりは、自ら行動することで自分の人生が繋がって広がっててる感じがして。だから、はっきり言うけど、自分のためにやってる。人のためだなんて、言えない。

### チャリティーの本質を理解して、楽しく、次に繋げる

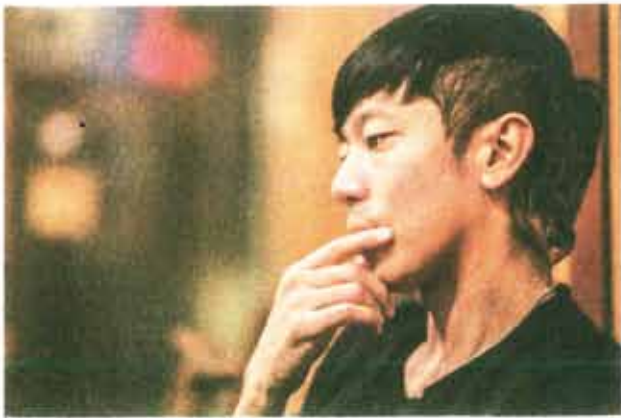
震災直後に急に、いろんな人がチャリティ、チャリティ言い始めたじゃん。その頃に初めてチャリティって何？って思ったから、本買って来て調べてみたの。そしたら思った通り、カネを集めて送ればチャリティってわけじゃないってことがわかった。いまだここで緊急の非常事態が起きてて、どういうアクションが必要かって情報を、支援を送れる地域に届ける、っていう重要な役割がある。そのへんは知れてよかったなって思ってる。

チャリテイイベントの作り方も調べてみるといろんなパターンがあって、俺がいいなと思ったのは、参加する人たちが楽しかったとか、元気が出たとか、そう思えるものに参加することで、いつの間にか重要な問題を身近に感じられるようになったり、理解できたりする。でまた行きたくなる、そういう良いサイクルでまわって広がってくようなもの。だからトークの企画でも「勉強になりました」とか「興味深かったです」って言うてくれるより、俺は単純に「今日、楽しかったです」って言うて帰ってくればいいなと思って。それが最初の感想になれば、きっと続いてく。

俺自身は、知的好奇心をくすぐってもらえるものであれば、笑いなんかなくても全然構わないんだけど、でも、チャリティをつくる基本は「楽」。見て「楽(ラク)」だし、「楽しい」。そして結果が世界を良くするものに繋がる。そういうものをつくってきたいよね。

細美さんの内面にある善と悪。目の前に叩き付けられた現実、自分の二面性を客観視しつつ、自ら行動することでその先の一步に繋げる姿。アースガーデン“冬”のステージに来て、細美さんの人間性を感じて欲しい。

一細美武士さん、アースガーデン“冬”でTALK & LIVE決定！  
当日までに関連記事をWEBにアップ予定、乞うご期待！



※フリーペーパー  
『earth garden』Vol.27 2015 冬号  
より転載させて頂きました。



※WEB サイトでも記事を  
配信中です。ご興味のある  
方は、「アースガーデン」  
で検索してみてください。  
www.earth-garden.jp



## ソーヤ海

文：渡辺 亮

### 共生革命家ソーヤ海が描く、 エコでピースでハッピーな都会暮らし

弊誌読者なら、お待ちかねの人もいるはず。共生革命家、ソーヤ海君による、初のアーバンパーマカルチャーガイド本が年明けに発売予定だ。いろんな問題がうずまく都会から、エコでピースでハッピーな生き方を提案する、希望の書となるに違いない。気になって仕方がないので、この機会を借りて、直接、海君に会い、本の概要を聞き出すことに。

「これは壮大な本プロジェクトなんだ！」と満面の笑顔で迎えてくれた海君。なんでも本の制作に関わった人材は自然発生的に生まれていったそうで、総勢約40名にもものぼるといふ。先日達成した、クラウドファンディングへの資金提供者も合わせたら、400名近くにもなる。

「僕がこれまでの人生で体験したものすごくステキな道を、都会に住んでいるような一般の人たちに、受け入れやすい形で表現しているのがこの本なんだ」と海君。パーマカルチャーの方法論を教えてくれる本は、もうすでにたくさんあるから、海君はあまり堅い内容にならないよう、大きな写真や美しいデザインにこだわって、仲間と相談しながら制作したという。章立ては5つからなり、[EDIBLE]、[DIY]、[EDGE]、[GIFT]、[STOP]に分けて、それぞれ、大きな哲学的な話から、ポップで愉快な事例が組み込まれる。

まず[EDIBLE(食べられる)]では、都会でできる自給への道を提案。ベランダや路地わきをうまく活用する方法を解説している。次の[DIY]では、「消費者から生産者へ」をテーマにビザ蓋やソーラー発電、ドームハウスなど様々なDIYを紹介。面白いのは文化のDIYという考え。「消費」を前提につくられている今の日本の文化活動から、自分たちの「創造」を豊かにして、実生活から社会までも豊かにしようとする。[EDGE]では、共有の場所をとるもどすことをテーマに、ゲリラ種まきやゲリラガーデニングなどユニークな事例を紹介しつつ、街づくりやコミュニティのデザインまで広げる。続いて[GIFT]では、贈与経済の重要性をいろんな事例をもとに解説。人に「与える」ことで、巡り巡って、自分に帰ってくるという支え合いの社会や地球環境の有難さを再認識する。そして最後の[STOP]では、忙しい現代社会で、立ち止まってまわりの状況や自分の心を見つめる手法を提案。禅や瞑想を生活に取り入れることで僕たちはもっと豊かになれるというもの。

ちょっと聞いただけでもわくわくするような内容だ。僕が言ってることは一部はお坊さんと変わらないし、一部はお百姓さんと変わらないし、一部は環境活動家と変わらないんだけど、それをみんなが「面白そう！」と受け取ってもらえるような本づくりを目指したんだ」と海君。

まずは都会の生活や人の繋がりを豊かにして、そこから広がる地球の未来に目を向けることの大切さ。まだまだ社会を面白くすることができそう。

アースガーデン“冬”で、ソーヤ海君のトーク出演が決定した。間に合えば、この本の販売も会場でもできるかも！ 地球への愛を発信する海君の世界に、ぜひ一度触れてみよう！



「都会からはじまる新しい生き方のデザイン  
URBAN PERMA CULTURE GUIDE」

監修：ソーヤ海／発行：SOUP DESIGN／価格(税込)：1900円



### GO!GO! FLYING BAMBOO GAUZE! 空飛ぶ竹ガーゼ社

文／写真：喜多田 圭子

earth gardenでもおなじみで、竹布のバイオニアである「ナファ生活研究所」が、新しく一般社団法人を設立したのはご存知だろうか？その名も「空飛ぶ竹ガーゼ社」。ナファ生活研究所の代表でもあり、空飛ぶ竹ガーゼ社の代表でもある相田雅彦さんにお話を聞いてきた。

「医療用のガーゼが本当に必要な国は、発展途上国なんです。先進国と違って、災害や紛争が起きた時の医療で、命を失うし、衛生環境も悪い。どうしても病気が蔓延したり、死傷者が増えます。そういう場において、金を守る布がガーゼなんです。竹布のガーゼは抗菌力がありますから、緊急時に大いに役に立つことができます。今までも、私たちの出来る範囲で、東日本大震災の被災現場や福島の人たち、さらに竹布のユーザーで重篤な症状の方が差し上げてきましたが、全世界にはさすがに提供できない。だから、公益法人にして、世界中の応援してくださる方から寄付を稼いで、大量のガーゼを備蓄し、いざというときに、最初に現場に入る団体に託す。そのために、空飛ぶ竹ガーゼ社を作ったわけです。」

ちょっと面白い法人名は、相田さんがロゴマークを絵筆で書いてみた時に、空飛ぶジュウタンに見えたことに由来する。全ての生きとし生けるものに、この竹ガーゼが囲まれますようにと祈りを込めて。

一詳しい活動内容は、ウェブサイトをチェック！！

空飛ぶ竹ガーゼ社 http://www.flying-bamboogaize.com/

No.4028 15-03 1/9

TAKUFU  
LIFE with BAMBOO.